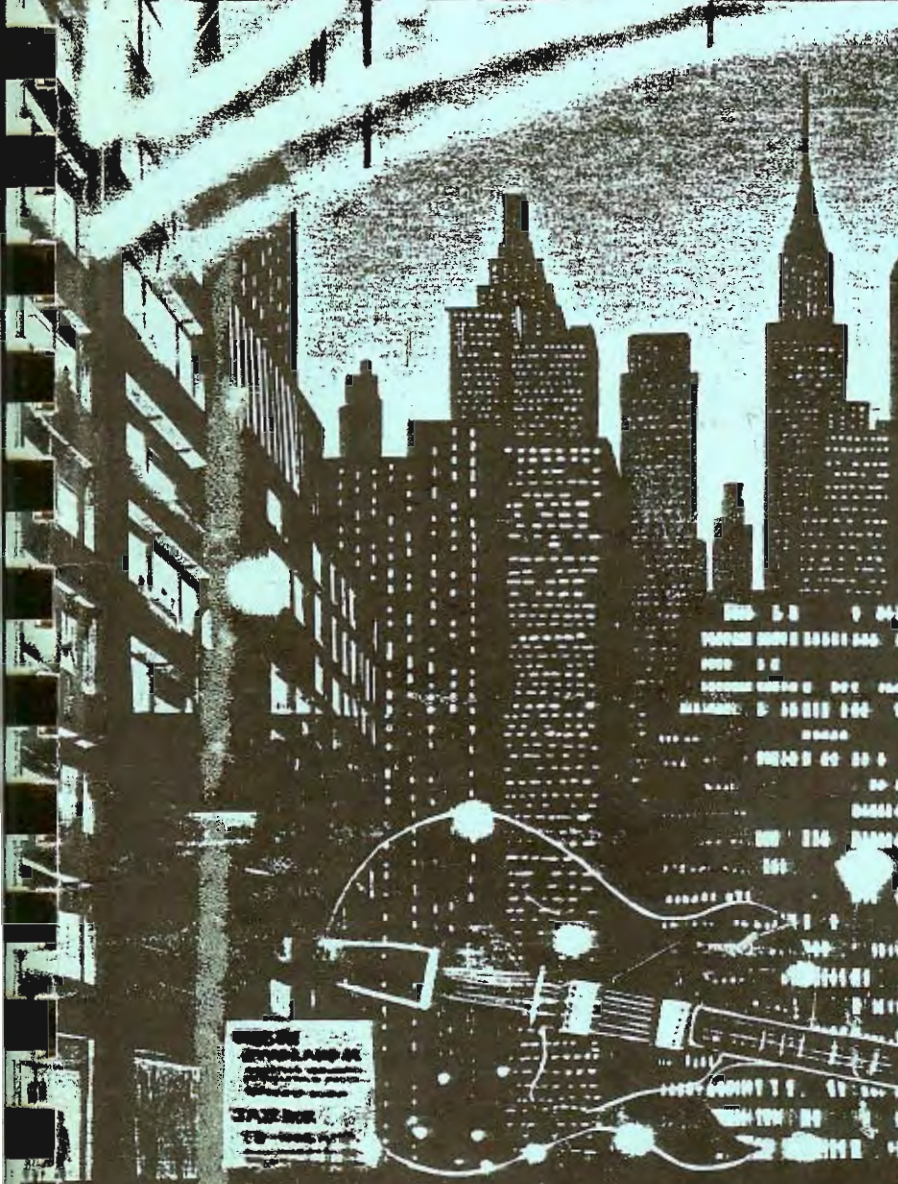


George Benson



GEORGE BENSON
BREEZIN'
1978-1980



GEORGE BENSON BREEZIN'

THIS MAGUIRE. SIX TO FOUR.
AFFIRMATION. GO THIS LEVEL.

♩ = 168 - Key of D

BREEZIN'

ブリージン

by Bobby Womack

もちろん、アルバムタイトルの曲で、オープナーにふさわしい軽快なナンバー。ジョージ・ベンソンの指ならし的なフレーズがビシッときまっている。(彼にとっては軽々と弾ける曲であっても、一般的なギター奏者がやると難曲、ハイ・グレードなプレーとしか感じられない——テクニックのレベルがちがうのである)

イントロのフルートとストリングスのダイアトニックなハーモニーは別録音でつけたもの。Ⅱの頭でテープがつかないである。(フルートも2回重ねたのだ)

コード進行は、いわゆる循環のパターンで4小節を最初から最後までくりかえしている“リップ”ナンバー。DとBm7のコードはDアイオニアン、Em7はEドリアンのモードでフレーズが作られている。

ベースのスタンリー・バンクスはエレキ・ベースを弾かない——つまりウッド・ベース(コントラバス)にエレキ・アタッチメントをつけているわけ——ので、リズム・ギターのフィル・アップチャーチがこの曲ではエレキ・ベースを弾いている。

ベンソンはもちろん、テーマとソロをやっているわけだが、さらにサイドのパターンを2種類オーバー・ダビングしている(Bの2ndギターのパターンとCの2ndギターのパターンのすべてはかさねられている!)

ベンソンはさりげなくシングル・トーンを中心にフレーズをまとめているが、中間は4th & 5th ストラクチャー(インターバル)を効果的にはさんでムードを変えるなど、流石である。シンプルなバック・グラウンドのストリングスがさわやかさを引き出している。

© Copyright 1971, 1976 by UNART MUSIC CORPORATION and TRACEBOB MUSIC Co.

Assigned for Japan Formosa, the Philippines and Korea to United Artists Music. (Japan) Inc., Tokyo, Japan

A DM9 (INTRODUCTION) FM9 AM9

G. BENSON

2ND GUITAR

FLUTE

E. BASS

DRUMS & LATIN

STRINGS

さて、ジョージ・ベンソンのサウンドの特徴はシングル・トーン・ピッキングと、オクターヴ・ピッキング、さらに次にあげる4th及び5thストラクチャー・ピッキングにある。

(ウェスのようにブロック・コードのフレーズはあまり使用していない)

では、4th及び5thストラクチャー・ピッキングについて説明しよう。これはオクターヴ・ピッキング奏法の変形といえる。つまり、1オクターヴの中にさらに1音加えて、合計3つの音を同時にならず奏法である。(オクターヴ奏法の時の中間にミュート弦をミュートしないことによって得られるピッキングのフォームのことである)

オクターヴ奏法+高い方からの音程差が4度(完全4度)のものを4thストラクチャー・ピッキングという。同様に高い音からの音程差が5度(完全5度)のものを5thストラクチャー・ピッキングという。この2つは単なるオクターヴ奏法より力強いサウンドが得られるところに特徴がある。4thストラクチャーはファンキーなひびき、5thストラクチャーはよりきらびやかなサウンド・カラーを持っている。実際はスケール又はテンション内のコード・トーンを4th又は5thのどちらか選択して演奏される。ジョージ・ベンソンの場合、選択の感覚がとても優れていて、ミストーンがほとんどないのに気づかれると思

う。では4thストラクチャーと5thストラクチャーの例を上げておこう。このピッキングは通常高音側の3弦を使用して奏され、低音側ではあまり効果が出ない。——従って、使われる音域は1弦がメロディとなり約1オクターヴ半のフレーズのみに使われるが、速いフレーズを弾ききるためにはかなりの練習が必要である。

☆4thストラクチャー・ピッキング

X X X
6 5 4 3 2 1

1弦→4フレット (G'又はA')

2弦→4フレット (D'又はE')

3弦→1フレット (G'又はA')

上3弦だけをピッキング